



YMCA のキャンプで 培った感性

烏賀陽 百合

Ugaya Yuri

庭園デザイナー
庭園コーディネーター

▼私を育てたのは YMCA ？！

「お母さんはあなたを育ててないわよ。YMCAが育ててくれはったんよ。」私が子どもの頃、母はよくそう言っていた。幼稚園の頃からサバエキャンプに行き、小学生から高校生まで、京都今出川YMCAの野外活動と体操教室に通っていた。夏休みや冬休みになると必ずYのキャンプに参加し、八ヶ岳、志賀高原には毎年行っていた。当時はもちろんグランピングなど無く、自分達でテントをたて、薪を拾い、火を起こし、ご飯を作る。何度もキャンプを経験するうちにすっかり火起こしが得意となり、高校生の頃は「特技は火起こしです。」と言っていた。祖母にも「たとえ世界が滅びても、貴女は生き残れる。勉強よりも素晴らしいスキルだ！」と褒められた。

▼野外リーダー時代

大学生になってからは、京都伏見YMCAの野外活動のリーダーになった。リーダーになってから、プログラムの企画がこんなにも大変だという事を知った。本番までに何度もミーティングをし、下見をする。子ども達が楽しんでくれて、自然を好きになってくれるプログラムを、夜遅くまで打ち合わせし、必死に考えた。毎晩遅くに家に帰ってくる私に母は「今までお世話になった主事さんやリーダーへの恩返しやな。」と言っていた。メンバーの時の私はとても手のかかる子どもだった。キャンプの途中でこけて木の根っこで胸を強打し、救急車で運ばれたり、スキーキャンプで熱が出て寝込み、キャンプの間ずっと主事さんにつきっきりで看病してもらったり。まさに因果応報。私のボランティア活動を母は「社会奉仕」と言わず、「奉公」と呼んでいた。



《野外リーダー時代の鳥賀陽さん》

▼女の子だけのサバイバルキャンプ

それでも子ども達とのキャンプは本当に楽しかった。夏の日本海キャンプは、小学生から高校生までの女の子達が1週間キャンプ生活するというサバイバルなものだった。思春期の女子の集団生活が1週間、それも野外のキャンプとなると、もう楽しいだけではやっていけない。一人一人の悩みや、健康状態、人間関係のもつれなど、次々と起こる。

しかし「日本海」という大自然を前に、メンバーはどんどん逞しくなっていく。最初は薪も拾えなかった女の子が、最後には立ち枯れている木の枝をバキッと折っていく。火起こしもどんどん早くなっていく。食器を使わず、かぼちゃを1個くり抜いてスープを作る子や、お菓子を焼く子までいた。そんな姿を見ていたら、こっちまで必死で逞しくなっていた。大人も子どもも成長するキャンプ。今、思うと不思議な体験だった。



《志賀高原ネイチャーキャンプ／野柴木先生と》

▼キャンプ経験が活かされる

現在、私は庭のデザインの仕事や、庭園の講座や日本庭園についての本を執筆し、「庭園の魅力を伝える」仕事をしている。大学卒業後は自然やキャンプとは無縁の会社で8年勤めたが、30歳の時に淡路島の景観園芸学校へ行き、その後カナダのナイアガラ園芸学校に3年留学し、園芸やデザインの勉強をした。会社を辞める時「次は必ず自然を扱う仕事をしよう」と決心したのは、自然が常に側にあったYMCAのキャンプ生活が、自分にとって一番「心地よい」経験だったからだ。

ナイアガラ園芸学校は自然豊かな植物園の中にあり、生徒は敷地内の寮に住む。朝外に出ると鹿の親子に出会えるような環境だった。生徒が植物の維持管理を任せられ、木を切ったり、花壇のデザインをしたり、種の仕入れ、植物を育てること、塀を建てること...全て自分達で行った。また植物や木の名前も全てラテン語で覚えなくてはならず、テストも厳しかった。毎日外での作業と勉強でかなりハードだったが、YMCAのキャンプ生活のお陰でどんな環境にも対応出来るようになっていた。カナダ人達との集団生活に順応出来たのもYMCAのお陰だ。なぜか生徒達は週末の飲み会の度に大きなキャンプファイヤーをするので、期せずして火を起こす経験が役に立ち、重宝された。

日本庭園には、日本人の自然に対する畏怖の念や尊ぶ気持ちが、意匠化して落とし込まれている。庭にもみじの木や苔があることで、私達は自然を身近に感じ、ホッと安心する事が出来る。日本庭園の良さを知るとき、自然の樹々や滝などの美しさや偉大さを知っていなければ、多くを感じ取れないだろう。それらを感じ取れる「感性」を、私は幼稚園から大学生までYMCAのキャンプを通して、自然と身に付けたのだと思う。



《冬の清里高原キャンプ》

▼キャンプで得たものを社会へ

YMCAキャンプで教わった歌の中でも1番好きなこの曲は、「自然の記憶の心地よさ」を私に教えてくれた。

わたしの子供たちへ

生きている鳥たちが 生きて飛びまわる空を
あなたに残しておいて やれるだろうか父さんは
目をとじてごらんなさい 山が見えるでしょう
近づいてごらんなさい コブシの花があるでしょう。



山の景色を遠くから眺め、だんだん近づいて、最後はミクロな視点で花を愛でる。なんて日本人らしい感性だろう。この歌のような「自然の記憶の積み重ね」が、人を優しい気持ちにさせたり、他人や自然との距離感を知ったりする。この感覚は今も私が庭園を鑑賞する時やデザインをする時にとっても役に立っている。今後も「庭」を通じて、YMCAのキャンプで得たものを社会に還元出来れば嬉しい。これからも私の「奉公」の日々は続きそうだ。

Profile



同志社大学文学部日本文化史卒業。兵庫県立淡路景観園芸学校、園芸本課程卒業。カナダ・ナイアガラ園芸学校で園芸、デザインを3年間勉強。またイギリスの王立キューガーデンでインターンを経験。これまで30ヶ国を旅し、世界の庭園を見てまわる。2017年3月ニューヨークグランドセントラル駅、2021年1月新宿京王プラザホテルロビーに日本庭園を作り、プロデュースした。

現在、東京、大阪、京都、広島など全国のNHK文化センターや旅行会社などで、庭園講座やツアーを開催。また京都紀行番組などで庭園を紹介している。

著書

「一度は行ってみたい 京都 絶景庭園」(光文社知恵の森文庫)

「しかけに感動する京都名庭園」(誠文堂新光社)

「ここが見どころ 京都の名庭」(淡交社)

「しかけにときめく京都名庭園」(誠文堂新光社)

「しかけに感動する 東京名庭園」(誠文堂新光社)

「京都 もてなしの庭」(青幻舎)

「美しい苔の庭」(エクスナレッジ)



【取材：京都 YMCA ウェルネス事業部】